

第1章 豊橋市の概要

1. 沿革

この地方は、古くは穂国(ほのくに)と呼ばれていたが、大化の改新の頃三河国に統合され、鎌倉時代には今橋と言われるようになった。

その後、永正2年(1505年)に牧野古白が今橋城を築いてから、政治的・軍事的要地として戦国武将の攻防が繰り返され、今川義元の支配する吉田と改称され、江戸時代には譜代大名9家22代にわたる城下町として、また東海道五十三次34番目の宿場町として当代交通の要衝であった。

明治2年に吉田は豊橋と改称され、同22年に町制施行を経て、明治39年8月1日、県下で2番目に市制を施行し、人口37,635人の豊橋市が誕生した。

戦前は、糸の町あるいは軍都として発展し、特に蚕糸業は本市の代表的な産業であり、豊橋の象徴でもあった。昭和20年の空襲で市街地の90%を焼失したが、終戦後には戦災復興事業、都市計画事業の推進により都市整備が行われ、公園・街路樹などの緑豊かな都市として生まれ変わり、太平洋ベルト地帯の中間に位置する恵まれた地理的条件のもと、工業整備特別地域、農業経済圏などの指定に基づく開発、整備とともに、三河港も国際貿易港として整備が進み、自動車輸入が台数、金額とも全国一となるなど、全国有数の自動車貿易港としてめざましい発展を遂げている。

平成11年4月1日に全国で22番目の中核市となり、平成18年8月1日には市制施行100周年を迎えた本市は、令和3年3月に新しいまちづくりの指針となる「第6次豊橋市総合計画」を策定し、「私たちがつくる 未来をつくる」をまちづくりの基本理念に定め、「未来を担う人を育むまち・豊橋」の実現に向けた取組みを進めている。また、将来にわたって活力を保ち、持続的な発展を図るため、「第2期豊橋市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、創生に向けた取組みを総合的に推進している。

2. 地理

本市は愛知県の東南端に位置し、東は静岡県、北は豊川市・新城市と接し、南は太平洋、西は三河湾に面し、温暖な気候に恵まれている。また、東西大経済圏のほぼ中央に位置しており、東京駅及び大阪駅から2時間以内の行動圏域にあり、ハイウェイ・ネットワークでも東西大経済圏から4時間圏域に包含されるなど、陸海交通の要衝をなしており、恵まれた立地条件にある。



○市の広さ(令和3年1月1日現在)

- ・面積:261.91km²
- ・東西距離:17.8km
- ・南北距離:23.9km

○気候(令和2年)

- ・平均気温:17.3℃
- ・最高気温:38.9℃
- ・最低気温:-0.3℃

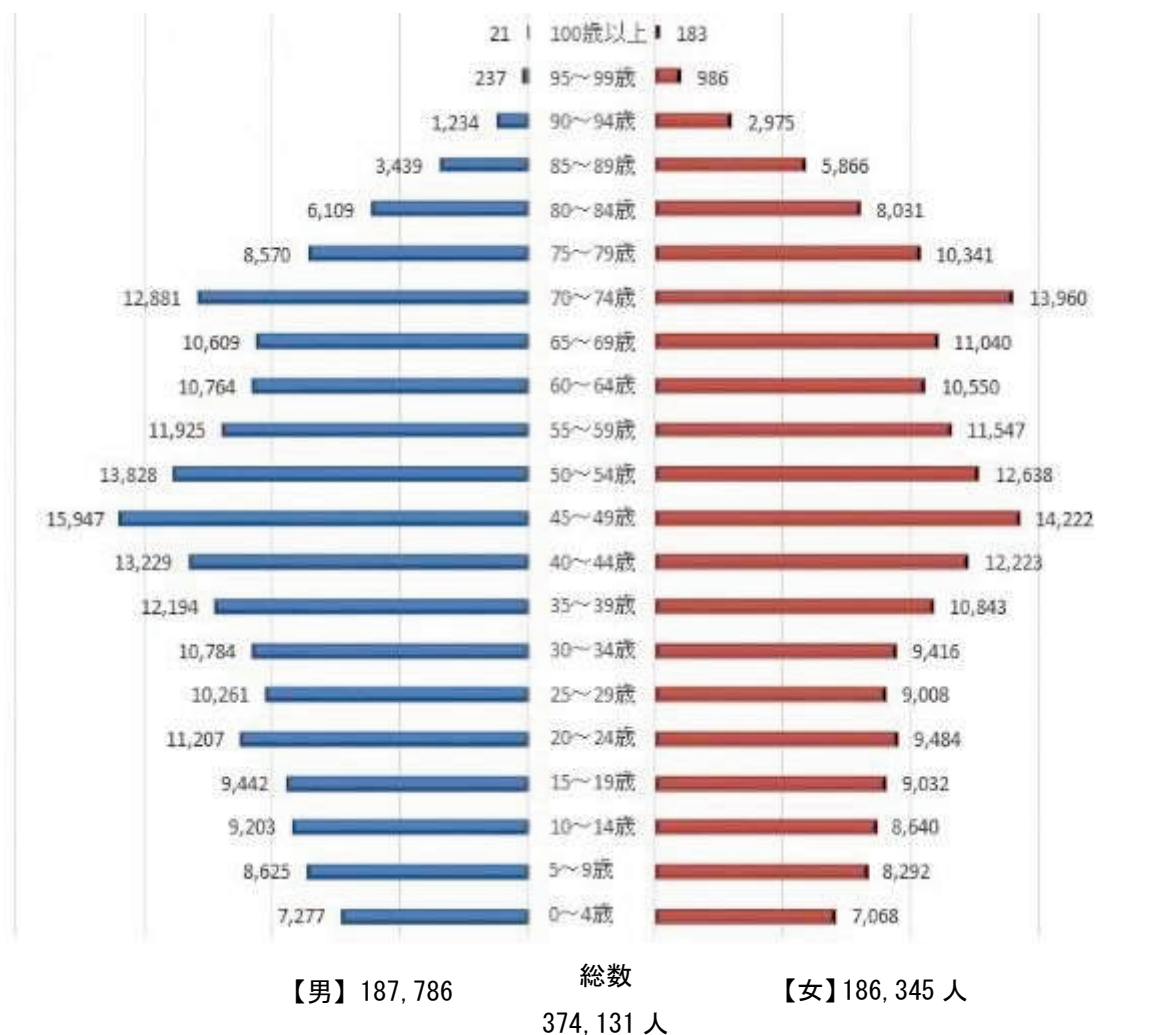
3. 人口

(1) 年齢別人口

本市の年齢別人口の特徴としては、若年層が低く少子化が顕著となっている。将来的には就業者人口の減少による産業への影響が懸念される。

○年齢別人口

(令和3年4月1日現在)



資料:豊橋市年齢男女別人口表

(2) 産業別就業人口

平成27年国勢調査における15歳以上の就業者総数179,590人を産業3部門別にみると、第1次産業は10,237人(5.9%)で、第2次産業は53,460人(30.9%)、第3次産業は109,158人(63.2%)となっており、第3次産業への移行が進んでいる。ただし、本市は農業産出額が全国有数の農業地域であり、他の主要都市や全国との比較においては第1次産業の割合が高い傾向が見られる。

また個別業種(大分類)では、製造業の39,125人(21.8%)が最も多く、次いで卸売・小売業の29,130人(16.2%)、医療・福祉の19,229人(10.7%)、建設業の14,263人(7.9%)の順となっている。

○産業別就業人口(15歳以上)の中部地方主要都市の比較

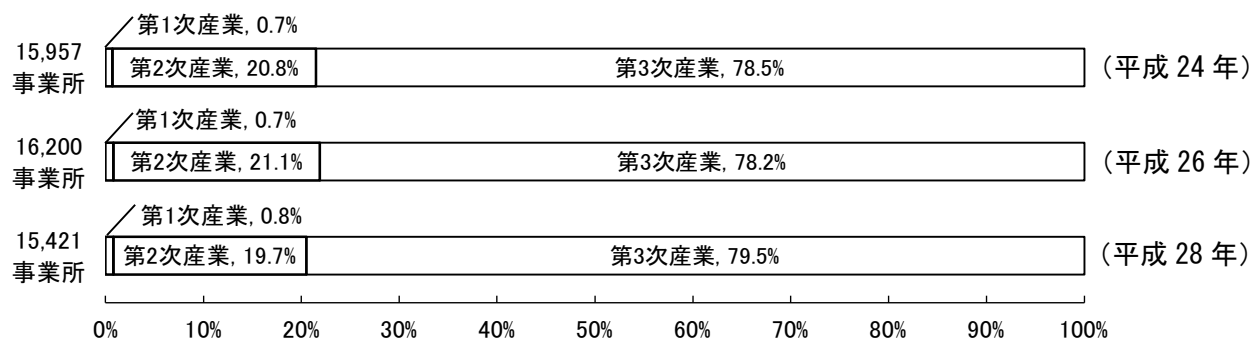
(単位:%)

都市名 産業	豊橋	名古屋	豊田	岡崎	一宮	浜松	静岡	岐阜	四日市	長野	全国
第1次産業	5.9	0.2	0.5	1.6	1.3	4.1	2.6	1.7	1.3	5.9	4.0
第2次産業	30.9	21.5	53.2	36.1	28.3	31.5	25.2	19.4	34.8	21.5	25.0
第3次産業	63.2	78.3	46.3	62.3	70.4	64.4	72.2	78.9	63.8	72.6	71.0

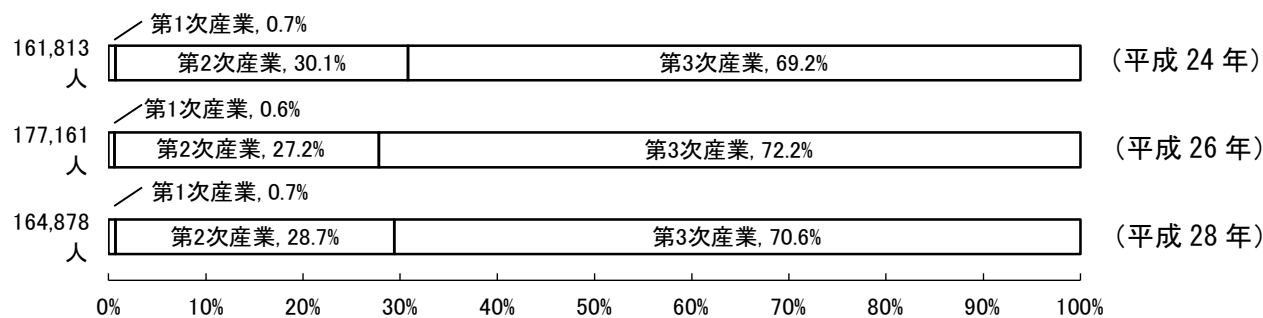
資料:平成27年国勢調査

※分類不能の産業は除く

○産業別事業所数の推移



○産業別従業者数の推移



資料:経済センサス基礎調査(平成26年)、経済センサス活動調査(平成24年、28年)

(3)昼夜間人口及び流出入人口

平成27年国勢調査における流出人口(市内に常住し、市外で従業・通学)は48,385人、流入人口(市外に常住し、本市で従業・通学)は37,519人であり、流出人口が流入人口を10,866人上回った。平成22年調査からは、流出人口が3,951人、流入人口が1,092人増加し、流出入人口の差は2,859人の拡大となった。平成12年調査で初めて100%を下回った昼夜間人口比率(夜間人口に対する昼間人口の比率)は、平成27年調査でも低下しており、夜間人口が昼間人口を上回る傾向が続いている。

○昼夜間人口及び流出入人口

年	市内常住人口		市内従業・通学人口		流出入人口 の差(人) A-B	夜間人口に 対する昼間 人口比率 (%)
	総数(人) (夜間人口)	流出人口(人) A	総数(人) (昼間人口)	流入人口(人) B		
昭和55年	304,256	22,953	311,407	30,104	△7,151	102.4
60年	322,136	27,861	325,610	31,335	△3,474	101.1
平成2年	337,705	35,192	338,443	35,930	△738	100.2

7年	352,840	38,515	354,060	39,735	△ 1,220	100.3
12年	364,147	40,941	362,791	39,585	1,356	99.6
17年	371,534	45,258	364,999	38,723	6,535	98.2
22年	376,665	44,434	368,658	36,427	8,007	97.9
27年	374,765	48,385	363,899	37,519	10,866	97.1

資料:国勢調査